

題名 「ふろぐれす」

作・倉田淳

人物メモ・状況メモ

登場人物

溝口真理子

長女二十二歳

三越デパート紳士服売り場、ネクタイ販売担当。

溝口芙美子

次女二十一歳

出版社に勤めたかったが面接で落ちた。

今は詩を投稿しながら週三日を本屋の店番、週二日を伯母の小津安子の手伝いで過ごしている。

溝口日向子

三女十八歳

じき十九歳になる。女学校卒業後、家事手伝い。

溝口球子

四女十七歳

来春、女学校卒業。

溝口晴子

四姉妹の母

四十歳。十八歳で溝口家に嫁いだ。

逋信省に勤めていた夫の茂之は十一年前に病没。

小津安子 伯母四十五歳

四姉妹の父、茂之の姉。横浜在住。
夫の健太郎は、繊維関係の輸出会社「小津商事」
を営んでいたが八年前に自動車事故で死亡。
安子は会社を引き継ぎ順調に経営。裕福。
子供はいない。

久我道彦 二十二歳

近隣の屋敷に祖父と二人で暮らしている。
祖父は貿易会社、久我商会の会長。
父親は久我商会のサンフランシスコ支社長と
して母を伴い米国に赴任中。
一人息子だった道彦は七年前から祖父の家で
暮らすこととなった。

森貞夫 二十四歳

学生時代、中学生だった道彦の家庭教師をし
ていた。音楽学校に進学希望だったが、親の許
可を得られず私学で経済を学び卒業。
思いを捨てられず、今はダンスホールでクラ
リネットを吹いているジャズ演奏家。

昭和十二年 冬

東京 杉並

西永福（大宮神社の近く）。道彦の祖父の持ち家に借家住まい。

一家は以前、千代田区の官舎で暮らしていたが、茂之が亡くなったので出なければならなかった。困っていたところ、茂之の姉の小津安子の伝手で貿易商仲間の久我が保有する家を借りることが出来た。

溝口一家が入居する前は、一時的に貿易関係の米国人に住まわせていた為、日本家屋ながらアンバランスな和洋折衷の名残がある。

縁側、火鉢、茶箆筒等がありながら、畳に絨毯、一部の窓にステンドグラス、座卓もあるが椅子とテーブルもあるといった混沌の味わいがある。

客電落ち、暗闇となる。

一条の明りの中に、たっぷりとしたオーバーを着て、頭を大判のスカーフで覆った大人の球子、現れる。

球子

はじめまして。溝口球子と申します。今日は、私達一家の事をお話しさせていただきたいと思えます。いえ、そんな大した家柄でも何でもない本当に在り来りの家族なんですけれども、年の瀬が近付いてくると妙に懐かしくなつて誰かに話したくなるんです。お付き合ひ下さいませね。

私達は杉並の西永福で暮らしていました。母と姉三人、そして末っ子の私、女だけの五人家族でした。通信省に勤めていた父は、私が六歳の時に病気で亡くなりました。風邪が元の肺炎だったそうです。それで千代田区にあった通信省の官舎を出て、父の姉の安子伯母さんの世話でこの家を借りて、此処で暮らしていました。

母の溝口晴子が、菜箸を手に現れる。

晴子

たまちゃん、球子、帰ったの？ おかしいわね、声が聞こえたような気がしたんだけど・・・気の所為かしら・・・（菜箸に気付き）アツ、お鍋！

母、忙しく去って行く。

球子

母の溝口晴子です。

日向子、新聞を手に現れる。

日向子

お母さん、新しく始まるNHKのラジオドラマ、「うもれ木」ですって。原作がオシップ・シュレービンという人で、森鷗外の翻訳ですって。今夜、八時からよ。

日向子、新聞を置き、去って行く。

球子

今のが日向子姉さん、すぐ上の姉です。去年、高等女学校を卒業して、今は家事手伝い、母の手助けをしています。

球子、日向子の置いて行った新聞を手取る。

球子

えーと今日は（新聞の日付を見る）昭和十二年 十二月十九日……って、私、十七歳だわ！ 何てこと！……ちょっと失礼。

球子、客席に背を向けると、スカーフを取り、オーバーを脱ぐ。そして、身だしなみを整え、前を向く。

球子

失礼致しました。十七歳の球子です。老けて見えるかもしれませんが、昭和十二年では、私、十七歳なんです。

勢いよく現れる芙美子。

芙美子

ただいま！ あら、球子、またボーツと突っ立って。油売ってる暇があるなら、お手伝いなさい。ほんとにいつまで経っても子供なんだから。

芙美子、去って行く。

球子

二番目の姉、芙美子姉さんです。二十一歳。週三日、本屋さんでお店番、週二日、横浜の安子伯母さんのお手伝い、あとの二日は詩を書いています。本当は出版社に就職したかったのに落ちちゃったんです、二次試験の面接で。すぐカットするから何か言わなくていいことまで言っただんじやないかと思うんですけど、芙美子姉さん、何も話してくれません。私を落と

すなんて、あの出版社は潰れるって呪ってました。
そろそろ一番上の真理子姉さんが帰って来る頃です。真理子姉さんは日
本橋のデパートにお勤めで、紳士服フロアのネクタイ売り場にいます。
ボーナスが出た時には映画や食事に連れて行ってくれます。

真理子、現れる。

真理子

ただいま。

球子

おかえりなさい。

真理子

あら、たまちゃん。(台所方向へ向け)お母さん、只今戻りました。

晴子(声)

おかえり。

日向子(声)

おかえりなさい。

真理子

たまちゃん、ほらまた脱ぎっぱなし。ちゃんと片付けなさい。

真理子、去って行く。

球子

はい。真理子姉さんは優しいのに、ちょっと口煩いところが玉に瑕です。

球子、オーバーとスカーフを持ち、去る。

日向子が現れ、座卓、テーブルの上を拭く。

伯母の小津安子、現れる。

安子

お邪魔しますよ。

日向子

安子伯母さん、いらっしやい。(台所方向へ) お母さん、安子伯母さん。

晴子、小走りに現れる。

晴子

まあ、姉さん。さ、どうぞ、どうぞ、お上がりになって。

日向子はお茶の支度に台所方向へ去る。

安子、椅子に座る。

安子 真理子は？

晴子 ええ。(奥へ) 真理ちゃん、真理子、安子伯母さんがお見えよ。

真理子(声) はい、只今。

晴子 姉さん、横浜からご足労かけてすみません。

安子 いいのよ、気にしなくて。次いでと言ったらなんだけど、今日はこの後、大手町で貿易商会の会合。

晴子 お忙しいところすみません。

真理子、芙美子、現れる。

真理子 安子伯母さん・・・

芙美子 いらっしやい。

安子

さ、真理子、こっち、こっち。

安子、手で隣の椅子を示し、真理子、そこへ座る。

芙美子は一隅へ行き、球子も現れ芙美子の横へ行く。

途中で日向子、紅茶を持って現れ、安子の前に置く。

安子

今日はね、もうお分かりと思うけど、こないだの返事を聞きに来たの
で、どうなんだい？

真理子

・・・ええ。

安子

こんないい話は、もう二度とないかもしれないよ。帝大出で外務省、家柄
も良くて、文句のつけようが無い相手じゃないか。

真理子

ええ。

安子

姿形だって、そりゃあ映画スターって訳にはいかないけど人並みなら充
分だし、物静かで無駄口は叩かない。これだけ好条件がそろった人は、そ
う居ないよ。何を迷っているんだい？

真理子
そんな、迷うだなんて・・・

安子
ね、いいかい真理子、あつという間に歳を取っちゃまうんだよ、女は。それ

にまだ三人も下がつかえてるんだ。こういうことは上から順に片付かなきゃ話にならないってこと、分かってるだろう？

真理子
はい。

安子、紅茶を飲み干し

安子
向こうは、お前の事、随分と気に入っててね。勿体ない話だよ、本当に。

安子、立ち上がる。

晴子
あら、もうお帰りですか？

安子
車、待たせてるからね、もう行かないと。日向子、お前の淹れる紅茶はいつも本当に美味しいね。

日向子
(ニコツと笑顔で答える)

安子
いいかい、真理子、チャンスってものは、いつまでもグズグズしてると逃

げちまうもんなんだからね。サッサとお決めよ。じゃあ、また。

晴子
本当に申し訳ありません。

嵐のように去って行く安子。四姉妹、揃って見送る。

球子
まるで嵐みたい。

芙美子
ホント、台風一過。

晴子
おやめなさい、二人とも。安子伯母さん、本当に心配して下さってるんだから。

晴子、紅茶のカップを台所へ下げに去る。

芙美子

分かってるわ。でも毎週お手伝いに行ってるよね、時々息苦しくなるのよ。お父さんと全く正反対。兄弟だなんて信じられないわ。

日向子

お父さん、穏やかな人だったものね。

芙美子

真理子姉さん、いくら世話になってるからって気にすることないわ。気に入らなければ断って構わないと思う。

真理子

でも本当に安子伯母さんには良くしていただいているもの・・・私達の学費の援助もしてくださったし、この家だって伯母さんの伝手で久我さんが安く貸して下さってるし、

球子

此処、私達の前はアメリカ人が住んでたんでしょう？ それでステンドグラス入れて畳剥がして床貼って、テーブルと椅子用意したりしたって通彦さんに聞いたわ。ベッドもあつたけど、知り合いにあげちゃったんですって。ベッドで寝てみたかったなあ。道彦さんのおじいさん、本当にお金持ち。いいなあ。

芙美子

おかげでここは、アメリカの残骸と私達が持ち込んだ古道具で混沌。近代

日本の現実を目の当たりにしてるってところね。混沌から真実を見出すのは並大抵じゃないと思うけど、私、結婚相手とは、作為じゃなくて運命で出会いたいわ。

球子

どうということ？

芙美子

古き慣習のお見合いで、わざわざ機会を作らなくても、出逢うべき人には何処かで必ず出逢うってこと。

球子

もし逢えなかったら？

芙美子

その時はその時よ。これが定めと一生独身を貫くわ。

球子

芙美子姉さん、強い。私はお金持ちと出逢えますようにって毎晩お祈りすることにするわ。

この時、豆腐屋のラッパの音が聞こえる。

鍋を手に現れる晴子。

晴子 誰か、お豆腐、買って来てちょうだい。

日向子 はい。

晴子 三丁ね。

晴子、割烹着のポケットからがま口財布を出し、小銭を日向子に渡す。日向子、鍋とお金を手に去る。

芙美子 湯豆腐？

晴子 ええ。それと秋刀魚。

晴子、台所へ去って行く。

真理子 七輪の火、おこすわ。

真理子、去って行く。

芙美子

ああ、お腹空いた！ お風呂、焚いてこようつと。タマ、あんたもサポつてないで手伝いなさい。ほら早く動いて、タマ！

球子

球子です！ 猫みたいに呼ばないで！

芙美子、おどけた仕草をして去る。

球子

(客席に) 真理子、芙美子、日向子って、姉たちは漢字三文字なのに、私だけ漢字二文字。それもボールの球っていう漢字です。父は三人も女が続きから今度こそ男の子と想ってたのに、私は期待を裏切ったらしいです。息子とキャッチボールをするのが父の夢だったとか。それでヤケツパチみたいにボールの球子になったんじゃないかって、ちょっと恨んでます。

真理子姉さんがお見合いの答えを出さないまま三日が過ぎました。今日
は真理子姉さんも休みで家にいます。芙美子姉さんも休みで詩を書い
ます。私は昨日から冬休みに入りました。

道彦、現れる。

道彦
こんにちは！

球子
いらっしやい！
(奥へ大声で) 道彦さんよ！

晴子、真理子、日向子、現れる。

晴子
まあ、道彦さん、いらっしやい。

真理子
こんにちは。

日向子
(会釈)

晴子
さ、お上がりになって。

道彦、中へ入る。
日向子、去る。

晴子
久しぶりね。おじい様、お変わりなく？

道彦

はい。相変わらず威張ってます。僕はちょっと横浜の方へ修行に出されてまして、昨日、戻りました。

真理子

横浜支社？

道彦

そう。やっと解放！ 朝から晩まで書類に囲まれて、殊に税関の書類がややこしくてね、本当に参ってた。

芙美子、現れる。

芙美子

オッス！ 久我商会の御曹司！

晴子

何です、芙美子、ちゃんとご挨拶なさい。

道彦

いいんですよ、おばさん。こういうの聞くと、ああ、帰って来たんだなってホッとします。今日は、おばさんにお問い合わせがあつて来たんです。

晴子

まあ、何でしょう？

道彦 真理ちゃんと芙美ちゃん、お借りしたいんです。日比谷公会堂で音楽会があるんですけど、お誘いしてもいいでしょうか。

球子 (身を乗り出して) ええっ！ 行きたい！

芙美子 (球子を押さえて) あんたは誘われてないの。子供だから。

日向子、紅茶を手に現れ、道彦にすすめる。

道彦 有難う。日名ちゃんの淹れる紅茶は香りの立ち方が違うね(一口飲み)

いい香りだ。(カップを置き) 僕の家庭教師だった森貞夫、覚えてます？

晴子 ええ。家の子達もお相伴で宿題みていただいたりしてましたもの。

道彦 貞夫さん、やっぱり音楽の道が諦められなくて、今、楽団にいるんです。

晴子 まあ！ 何、弾いてらっしゃるの？ ピアノ？ バイオリン？ 楽器の名前、そのくらいしか分からなくて。

真理子

クラリネットよ、お母さん。

驚いて真理子を見る晴子。

道彦

かなりの腕前で、良い音、出します。今度の土曜、夜六時からなんですけれど、僕、ちゃんとお二人をお宅まで送り届けますので、お借りしてもいいでしょうか？

球子

いいな、いいな、私も行きたい！

芙美子

(球子をひっこめて)お母さん、いいでしょう？ 日比谷公会堂よ、危ないところじゃないわ。それに道彦さんが、ちゃんと送ってくれるって。

道彦

もう切符、買っちゃったんです。ちょっと早いけれど、真理ちゃんと芙美ちゃんへのクリスマスプレゼントにさせて下さい。お願いします。

芙美子

ねえ、いいでしょう？ お母さん。

晴子

分かりました。行ってらっしゃい。(道彦に)宜しく願いますね。

道彦

はい。

球子

いいな、いいな、

芙美子

(球子の頭をビシヤリと叩き) タマ、しつこい！ 曲目は？ 何？

道彦

洋楽。もちろんスイングジャズ。真理ちゃん、「マイ・ブルー・ヘブン」は絶対プログラムに入れるって。

真理子、晴子を気にしながらニコツと笑顔で答える。

日向子

道彦さん、お昼は？

晴子

大したものは支度できませんけど、どうぞ、召し上がってらして下さいな。

道彦

残念です。僕、おじいさまと約束してて。これから銀座へ行かなきゃならないんです。

球子
フルコースの御馳走？

道彦
商談を兼ねてね。本当は、ナイフとフォーク持つより、お箸持ってみんなと一緒に食事の方が楽しいんだけど、仕方ないや。

芙美子
御曹司の宿命ね、健闘をいのるわ。

道彦
おう。(晴子に向き直り) おばさん、お邪魔しました。

晴子
お構いもしませんで。おじいさまに宜しく。

道彦
はい。失礼します。

道彦、去って行く。

晴子
真理子、次の土曜日って明後日じゃないの。あなた、お休み取れるの？

真理子
ええ。

晴子、無言となり紅茶カップを持って去る。

球子　お願い。私も連れてって。

芙美子　無理よ。切符が無いでしょ。

球子　貯金箱、割るわ。切符代くらいあると思う。

芙美子　音楽会は夜なのよ。子供は家に居る時間なの。

球子　もう十七歳よ。大人だわ。ねえ、一緒に連れてって！

日向子　もう、およしなさいよ、球ちゃん。道彦さんが二人をつて誘ったんだからしょうがないでしょ。人生、時には諦めも必要よ。

球子　日向子姉さん、芙美子姉さんに味方して酷い。お母さんもお母さんよ、夜の外出を許すなんて。もう、いいッ。

球子、隅へ行って不貞腐れる。

安子、現れる。

安子
お邪魔しますよ。

芙美子
あら、伯母さん。

真理子
いらっしやいませ。

芙美子
(奥へ向かって) お母さん、安子伯母さん！

母、現れる。

晴子
まあ、姉さん。さ、どうぞ。

安子
今しがたね、神社のところで道彦ちゃんと会ったんだよ。来てたのかい？

晴子
ええ。

安子
まったく、あの子、いつまで経っても学生気分が抜けないうで、久我の

じいさんも大変だ。朗らかでいい子には違いないんだけどね。

日向子
道彦さん、ああ見えて案外しっかりしてらっしゃいますわ。

安子
そうかい？ 日向子がそう言うんならそうなんだろうね。

日向子
お茶、淹れてきます。(台所へ去る)

安子
そんなことより、真理子、いつまで待たせるつもりなんだい？

真理子、無言でうつ向く。

安子
実はね、来年の四月、サンフランシスコへ行かなきゃならなくなっちゃまっ
てね。

一同、驚いて安子を見る。

晴子
姉さんがサンフランシスコですか・・・アメリカの？

安子

他に何処にあるんだい。見本市に出品が決まったもんでね。この歳になつて外国まで遠出しなきゃならないなんて因果な話だよ。アメリカの大恐慌からこつち、景気はなかなか上向かないだろう？そこへきて七月の盧溝橋だ、日中戦争は始まっちゃまったし貿易商も生き延びるのに必死さ。だけど有難いことに繊維物の輸出だけは伸びてるんだ。綿も絹も日本の製品は優秀だからね。今、アメリカで使ってる絹の九割は日本製品が占めてるんだよ。

晴子

アメリカ人も、着物、着るんですか？

芙美子

ストッキングやドレスになるのよ、お母さん。

晴子

そうよね。嫌だわ、ごめんなさい。

安子

それで、もつと勢いつけようってことで見本市に出品することになって、この年寄りまで借り出されるって訳なんだよ。だからね、真理子、あんなの話を纏めて、心穏やかに船に乗りたいんだ。いくら立派な船だって一枚の下は大海原だ。何があるか分かつたもんじゃない。この話が纏まらなきゃ死んでも死にきれないよ。だから真理子、いい加減に決めておくれね。

真理子

・・・

安子

後、一週間にしよう。

真理子

え？

安子

物事は区切りつてものを付けないと先へ進めないんだ。後、一週間待って、お前の決心を貰いに来るからね。決めたからね、真理子。いいね。

真理子

・・・はい。

日向子、紅茶を持って現れ、安子の前に置く。

安子

(日向子に) ありがとよ。晴子さん、ひとつ頼みたいんだけどね

晴子

はい、何なりと。

安子

アメリカ行きとなるとね、やっぱり側に若い女の子がいた方が何かと安

心だからね、一人貸してほしんだよ。番頭も一緒に行くけど、男だもの、同じ部屋で寝起きする訳にはいかないだろう？ いろいろ手伝ってほしいこともあるし。行きの船が三週間、あっちの陸地でひと月かねえ、それで帰りの船も三週間、三月ほどになるけど構わないかい？

パツと顔を輝かせる芙美子。

晴子
お役に立てるんでしたら是非。

安子
ああ、安心した。有難う、晴子さん。

晴子
とんでもありませんわ。

安子
費用の心配は一切かけないからね。支度は全て、こっちでさせてもらいます。

晴子
すみません。

安子
(紅茶を飲み) 本当に、日向子の紅茶は天下一品だ。(一気に飲み干し)

御馳走さん。真理子、いいね、一週間だよ。

安子、立ち上がり帰ろうとする。

晴子

お昼ご一緒なさいませんか？ うどんの支度してあるんですよ。添え物は油揚げとホウレン草だけですけど。

安子

寒い日には何よりの御馳走だ。心残りだけど霞が関まで行かなきゃならなくてね。次の楽しみに取っておくよ。じゃ。いいね、真理子。

晴子

お気をつけて。

安子、去る。

日向子

安子伯母さん、本当に忙しい方ね。

芙美子

忙しいって言うより気ぜわしいのよ。

晴子

芙美子、あなた、サンフランシスコの事、聞いてたの？

芙美子

何となく耳に入ってたけど、未だ本決まりじゃなかったのよ。たぶん昨日、決定が出たんじゃなしかしら。私が手伝いに行った一昨日は未だ決まっていなかったもの。凄い！ サンフランシスコ！

真理子

芙美ちゃん、行くの？

芙美子

うん。もう何度も安子伯母さんの手伝い辞めようかと思っただけど、頑張っ
て続けて良かった。あの勢いで一方的に喋るでしょう？ ほんと疲れる
のよ。時々、息が詰まりそうになるの。でもね、尊敬もしてるのよ。おじ
さんが自動車事故で突然亡くなったでしょう？ 会社畳むか人に譲るか
と思っただのに、後継いで立派にやってるんだもの。偉いなって思うわ。
どうしたって現実には男社会じゃない？ その荒波の中に女一人で立ち向
かっているのよ。並大抵の根性じゃないわ。安子伯母さんの武器は言葉ね。
次から次へと機関銃みたい。嗚呼、私、耐えられるかしら。三ヶ月も毎日
べったり一緒なんて。

晴子

そんなことで、ちゃんと安子伯母さんのお世話をできるのかしら。あなた
に務まるか心配だわ。

芙美子
心配ご無用。やるべき時には最善を尽くす。私、溝口芙美子のモットーで

ございますから。

晴子
真理子、一週間もあるのよ。ゆっくり考えなさい。さ、お昼にしましょう。

母、台所へ去り、真理子、芙美子、日向子も去る。

球子
ずるい！ 芙美子姉さんばかり！ 音楽会にサンフランシスコに、良いこと独り占めだわ！

球子、奥へ去る。

明かり変化し、夕方となる。(時間経過のイメージ)
芙美子、現れる。

芙美子
真理子姉さん、まだあ？

真理子(声)
今、すぐよ。ちょっと待ってエ。

芙美子
(嘆息し、独り言) 真理子姉さん、ホント、いろんなことが遅いのよねえ。

真理子
(現れ) 何か言った？

芙美子
(首を振り) うううん。あっ！ 口紅、変えた？

真理子
ちよっと派手かしら。

芙美子
(強く首を振り) うううん。凄く綺麗よ！

真理子
(照れて) ヤダッ！ 芙美ちゃんたら！

真理子、芙美子の肩を勢いで叩く。

芙美子
やったわね。コノ、コノ、コノ！

芙美子、真理子を軽く連打する。

真理子

いったあい！

真理子、ニコニコ笑いながら痛がる。

芙美子

ちよつと！ こんなことしてる場合じゃないわよ。行かないきゃ。遅刻しちゃう。

二人、オーバーを着ながら会話。

真理子

待ち合わせ、4時半よね。

芙美子

そうよ。松本楼ロビー集合。道彦さんが腹ごしらえにカレー食べてから行こうって。

真理子

嬉しい！ 松本楼のカレー、最高よね。

芙美子

貞夫さん、本番前だけど、抜けられたら抜けて来るって。

真理子

まあ！ どうしよう！ 口紅、禿げちゃうわ。

芙美子

じゃあ来ない方がいい？ 道彦さんに、そう言う？

真理子

(ニコツと笑顔で) バカ。そういうことじゃないの。さ、早く行きましよう。

二人、靴を履き出掛けてゆく。

真理子

今日ね、早引け直前のお客様、ネクタイ二本並べて二十分も迷ったのよ。時間は迫るし、ホント、遅刻するんじゃないかってドキドキしたわ。

芙美子

そんなに迷うなら二本とも買えばいいのよ。

真理子

二本も一度に買えないわよ。三越は高級品しか置いてないんですもの。何か、清水の舞台から飛び降りるっていう感じのお支払いだったわ。いづもなら、もう少し丁寧にお相手するんだけど、今日はね。

芙美子

そうよ、仕方ないわよ。人生は決断！ 決断の連続ですもの。私は今、松本楼へ一直線！

二人、笑いながら去る。

明り変化し、本を持った不機嫌な球子が現れる。

球子

土曜の夜です。楽しそうに燥ぎながら出掛けて行った真理子姉さんと芙美子姉さんは、松本楼でカレーを食べて音楽会！ 私はお留守番です。私、松本楼へは未だ行ったことがありません。日比谷公会堂も前を通たことがあるだけ。音楽会にも未だ一度も行ったことがありません。

晴子、現れる。

晴子

球子、何してるの、もう八時半よ。真理子と芙美子、じき帰ってくるわ。早くお風呂、温め直してちょうだい。熱いお風呂にしてあげないと。寒いなか出掛けて風邪ひいたら大変。早くしてね。

晴子、去る。

球子

風邪でも何でもひけばいいんだわ！

球子、手にしていた本を見つめ、一瞬迷うが、意を決めて走り去る。

真理子と芙美子、「私の青空」を歌いながら現れる。

芙美子

ただいま！

晴子、日向子、現れる。球子も現れ、隅にいる。

日向子

おかえりなさい。

晴子

あら、道彦さんは？

真理子

そこまで送ってくれたわ。でも、もう遅いから帰るって。

芙美子

おばさんに宜しくって。

晴子

そう。熱いお茶で温まってもらおうと思ってたのよ。日向子が上等な紅茶、

買って来てたのに。(日向子に) ねえ。

日向子

無理に今日じゃなくても。本当にもう遅いし。

真理子

あら、紅茶、飲みたいわ。歌いながら帰ってきたから喉カラカラ。本当に素敵な音楽会だった。芙美子つたらね、アメリカに行ったら本場のジャズを聴きに行くって張り切ってるのよ。でも、私は今日の音楽で堪能したわ。

芙美子

カウント・ベイシー楽団やベニー・グッドマン、聴きまくってやるわ。

晴子

芙美子、遊びに行くわけじゃないのよ。安子伯母さんのお世話っていう大事な仕事で行くんですよ。

芙美子

分かってるって。

芙美子、奥へ去る。

晴子

(奥へ) たまちゃんが お風呂熱くしてくれたのよ。入っちゃいなさい。

芙美子（声）

イエッサー！

真理子

私は先に紅茶が有難いわ。

日向子

ええ、真理子姉さん。支度してくるわ。

日向子、去る。

顔色を変えた芙美子、現れる。

芙美子

ねえ、無いのよ！ 私の本！ 誰か持ってた？

日向子も戻り現れる。

晴子

ちゃんと探したの？

芙美子

探したわよ。押し入れ開けて布団の中まで探したわ。

日向子

どんな本？

芙美子 尾崎翠の「第七官界彷徨」よ。私のバイブルだわ。

球子、ツンと顔を逸らす。それを目にした芙美子、迷わず球子の前へ行く。

芙美子 球子、あんた、持ってたの？

球子 持ってってなんかないわ。

芙美子 じゃあ、何処にあるか知ってるのね！

球子 知ってなんかないわ。何処にあるかなんて知らないわよ。

芙美子 嘘つき！ 早く言いなさい！ 何処に隠したの！

球子 そんなにガミガミ怒鳴らないでよ！ あんな本、もうどこにも無いんだから！

芙美子 何よ、どういうこと？

球子

燃やしちゃったからよ！ 姉さんたちのお風呂を熱々にするために燃やしたのよ！ 悪い？

日向子

球ちゃん・・・

球子

たかが本一冊じゃないの！ 音楽会も行つて、アメリカにも行つて、良いことだらけじゃないの！ 本の一冊ぐらいどうつてことないでしょ！

芙美子、思わず球子の頬を打ってしまう。

驚く一同。

日向子

芙美子姉さん！

日向子、球子を庇うように芙美子の前に立つ。

芙美子

許さない。たかが本一冊なんてよく言えるわね。私を侮辱しただけじゃないわ、尾崎翠を侮辱して、作品を侮辱して、文学そのものを冒犯したのよ、あんたは！ 私、絶対に許さない！

芙美子、去る。シンとなる空間。

真理子

球ちゃん、芙美子と私、ちよつと調子に乗り過ぎてたわね。哀しい思いさせて悪かったわ。

晴子

でもね、球子。あなたがしたことは、いけないわ。

球子

ごめんなさい。私、芙美子姉さんに謝って来る。

晴子

明日になさい。今はあの子、聞く耳を持たないわ。あなた、痛い思いしたんだもの、今夜はもうそれで充分よ。

日向子

球ちゃん、少し冷やしてあげるから台所行きましょう。ちよつと赤くなってるわ。

日向子と球子、去る。

真理子

私、芙美子、見てくるわ。

晴子

やめときなさい。手を挙げるなんて酷いことして、焼け火箸掴んだような気分にいるだろうからね、暫くほっといた方がいいのよ。それより、あなた、冷めないうちにお風呂入ってらっしゃい。

真理子

はい、お母さん。

真理子去る。

晴子、嘆息し、台所へ去る。

明かり変化し翌日の午後となる。底冷えのする曇り日。

球子、現れる。

球子

昨夜は日向子姉さんのお布団に入れてもらって一緒に寝ました。でも、あんまり眠れないまま朝になってしまいました。

芙美子姉さんは口をきいてくれません。不機嫌にずっと黙ったままです。

お母さんや真理子姉さん、日向子姉さんが気を引き立てようとして色々

楽しいお喋りをしているのですが、三人とも一寸ワザとらしくて。嘘が

下手なんですネ、冷え冷えとした空気のままでした

芙美子、本を手に現れ、無言のまま座って読む。

球子

芙美子姉さん

芙美子は無視。

球子

ねえ、芙美子姉さん

芙美子、無視したまま。

落ち込む球子、が、深呼吸し話しかける。

球子

ごめんなさい、芙美子姉さん。

無視を続ける芙美子

球子

何度、謝れば許してくれるの。もう何回も謝ってるのに、酷いわ。

芙美子

我慢できないのよ。思わずかッとして、手を挙げたことは謝るわ。だけど、

やっぱり許せないのよ。あの本には、書き込みが沢山あったのよ。感動したところや、思いついた言葉や、色々書き込んだの。あんたも、私が一番大事してた本だって知ってたはずよ。知ってて燃やすなんて卑劣よ。だから許せない。

開いた本に目を移し、球子を見つめる芙美子。
球子、去る。

道彦、現れる。

道彦

こんにちはわ！

芙美子

ああ、御曹司。

道彦

えらく御機嫌斜めだ。どうしたんだい？

芙美子

ううん、何でもないわ。

晴子、日向子、現れる。

晴子
まあ、道彦さん、いらっしやい。

日向子
いらっしやい。

道彦
今日は、ビッグニュース持ってきたんです。

芙美子
何？

道彦
僕もサンフランシスコに行くことになったんです。

芙美子
え？ 本当！

道彦
ああ。オヤジが、いい機会だから僕も来いって。

芙美子
そうだっ！ お父様、久我商会のサンフランシスコ支社長だったのよね！ 忘れてた。

道彦
忘れるなんて酷いな。ま、無理もないや。七年も留守にしてるからね。

晴子
ご出発は、いつですか？

道彦
来年、二月の終り頃になりそうです。

日向子、台所へ去る。

芙美子
見本市は四月だわ。その後も、ずっと？

道彦
一年は居るんじゃないかな。オヤジに追い出されなきゃね。

芙美子
来年の春には向こうで会えるのね。

道彦
いろいろ案内するよ。先ずは今年の五月に竣工したばかりのゴールデンゲートブリッジだな。長さが二七八九メートル、おばさん、鉄で出来た橋の長さが半里以上あるなんて信じられませんよ。

晴子
本当ね。

道彦

ゴールデンゲートブリッジの側にはアルカトラズ島もあるよ。島が丸ごと刑務所になってるんだって。荒海に浮かんでる島だから脱出は絶対に不可能だからって、四年前から連邦刑務所にしたんだそう。勿論、中へは入れない。監獄だからね。眺めるだけだ。

芙美子

あとケーブルカー！ 坂の街だから沢山走ってるんですけどね。乗ってみたいわ。

道彦

何処に泊まるの？

芙美子

まだ何も。船もホテルも全部、安子伯母さんの方で手配ですって。

道彦

そうか。僕はオヤジとオフクロの処。近いホテルだといいな。

芙美子

ええ。

日向子

あ、雪。

日向子、紅茶カップを五客のせたお盆を手に見れる。

芙美子

ホントだ。

晴子

どうりで冷えると思ったわ。

道彦

(紅茶を受け取り)有難う。いい香りだ。

晴子

積らないといいけど・・・

芙美子

真理子姉さん、帰り、大丈夫かしら。電車、すぐ止まるでしょう？

日向子、一つ残った紅茶カップを見て

日向子

球子は？ 部屋？

芙美子

寝てるんじゃない？ 冬休みになって、怠けてばかり。余計なことするより寝てる方が安心だけど。

晴子

芙美子。

日向子
呼んで来るわ。

日向子、奥へ去る。

晴子
おじいさま、またお寂しくなるわね。

道彦
仕方ないです。オヤジも一人っ子だし、僕も一人っ子だから。お宅が羨ましいです。元気が良くて賑やかで、兄弟っていいなって。

芙美子
あら、家は兄弟じゃなくて姉妹だわ。でも、時々、うんざりすることもあるのよ。

日向子、戻る。

日向子
お母さん、球子、いないわ。

晴子
え？ オーバーは？

日向子 無いの。何処、行ったのかしら。雪だっというのに。

晴子 黙って出掛けるような子じゃないわ。芙美子、あなた、知らない？

芙美子 いいえ。

日向子 私、お風呂場、見てくる。御不浄も。

日向子、去る。芙美子、日向子の去った方向へ大声で。

芙美子 わざわざオーバー着てお風呂入る人なんかいないわよ！ 御不浄も！
ちよつと見てくる。

芙美子、奥へ去る。日向子、戻る。

日向子 居ないわ。

晴子 本当にどうしたのかしら。何処行ったんでしよう。

芙美子、自分のオーバーを手に現れる。

芙美子

お母さん、球子、貯金箱割って、割れたの机の引き出しに隠してた。お金持ってたんだわ、あの子。

日向子

家出!?

晴子

まさか、そんなこと。

芙美子

(オーバーを着ながら) 私、探してくる。

晴子

ちょっと芙美子

道彦

おばさん、僕も一緒に行きますから心配しないでください。

芙美子

見つけたら、すぐ知らせるから。お隣に、私から電話があったら、すぐ、お母さん呼んでくれて頼んでくわ。

日向子

(追いかけて) 私も行くわ!

芙美子

あなたは、お母さんの側に居て。じゃ。

晴子

気を付けるのよ！ 道彦さん、お願いします。

芙美子と道彦、去ってゆく。

二人を見送ったまま、じっとしている日向子。

晴子、紅茶のお盆を片付け始める。

晴子

(日向子に気付き) 日向子、風邪ひくわ。入りなさい。

晴子、お盆を持って台所へ去る。

日向子

あ、私、やります。お母さん。

日向子も台所へ去って行く。

明かり変化し、一隅に、本の包みを手にした球子、現れる。

球子

(空を見上げ) 雪です。ラジオの天気予報、当たりました。なのに私、傘も持たずに飛び出してしまつて・・・尾崎翠の「第七官界彷徨」を買う為に、神保町の三省堂へ行つてたんです。ええ、私が燃やしちゃった本です。大事にした豚の貯金箱を割りました。中身はほとんど安子伯母さんからいただいたお金です。お年玉や誕生日のお祝いや、たまに横浜へお使いに行つた時に下さるお駄賃なんかです。お友達とお揃いの刺繍のハンカチや、鳩居堂の便箋と封筒や、綺麗なものを買つた残りを豚の貯金箱へ入れてたんです。この本、何処が面白いのか私には分かりません。観念的過ぎるんだと思います。でも、芙美子姉さんに許してもらいたかつたんです。芙美子姉さんも、尾崎翠さんも「第七官界彷徨」という作品も、文学も、私は侮辱なんかしてないし、冒瀆もしてないことを解つて欲しかつたんです。

今、私は「マッチ売りの少女」の気分です。お腹が空いて、寒くて、切なくて、哀しいです。雪が酷くなつて、二つ手前の駅で電車が止まつてしまいました。歩いて帰らなければなりません。傘もないし爪先が濡れて氷のようです。きっとこれは罪を犯した私への罰です。ごめんなさい。

球子の明り、消える。

明かり変化し、家の中となる。
芙美子が居る。真理子、現れる。

真理子

道彦さんが一緒に良かったわ。ここまで、おんぶして運んでくださったんですってね。

日向子、現れる。

日向子

駅まで行ったら電車、止まってたんですって。それでとにかく上り方向に歩いてたら隣の駅の先で見付けたって。二人の顔を見るなり泣き出して、うずくまったつきり動けなくなっちゃたって。

暗く、うつむく芙美子。

真理子

芙美子、そんなに心配しなくて大丈夫よ。

芙美子

でも熱が有るわ、八度二分。

真理子

けんちん汁おかわりして、ご飯三杯も食べたじゃないの。寝ればすぐ下が

るわよ。明日にはケロッとしてるわ。

日向子 おんぶして歩いた道彦さんの方が大変だったと思うわ。

真理子 ホントよね。だからほら、元気出しなさい、芙美子。

芙美子 うん

真理子 日向ちゃん、今夜は私達の部屋にお布団敷くといいわ。三人で川の字で寝ましょ。

日向子 ええ。お布団、支度してくるわ。

日向子、去る。

真理子 芙美ちゃん、あなたが許す気持ちになって良かったわ。

芙美子 許すだなんて、そんな・・・私・・・

真理子

お風呂、入ってくるわね。あなたも早く寝る支度なさいよ。

真理子、去って行く。

嘆息し、膝を抱える芙美子。

晴子、現れる。

芙美子

あ、お母さん。

晴子

寝たわ、球子。あの様子なら明日の朝には熱もひくわね。あなたが行って
くれてほんとに良かったわ。あのまま歩き続けてたら、今頃は病院だった
かもしれないもの。

芙美子

球子を助けたのは私じゃない。道彦さんだわ。私は、あの子に辛く当たっ
ただけよ。みんな、この私の私の強さの所為なんだわ。嫌な性格だと思う。
一生直らないかもしれない。

晴子

そんなこと言っちゃだめよ。気長に構えて、欠点は一生直らないなんて
思い込まないでちょうだい。

芙美子

とても自信が持てそうにないわ。カッとなると、頭の中に火が付いたみたいになって、考えるより先にキツイ言葉がどんどん飛び出してきちゃうんですもの。言葉だけじゃないわ、球子には手まで出してしまっって・・・

晴子

私もね、若い時はそうだったの。

芙美子

お母さんが！？

晴子

ええ、そう。遺伝したのかしらね、あなたに。とんだ貧乏くじ引いちやったわね。

芙美子

でも、お母さんが大声出したり悪態吐いたりしたところなんて、見たことも聞いたこともないわ。

晴子

直すのに四十年もかかったのよ。でも、まだやっとな抑えられるようになってだけ。今でも、ちよつとしたことで腹の立つことは毎日あるわ。でも何とか表に出さなくて済むようになっただけなの

芙美子

安子伯母さんの機銃掃射みたいなおしゃべりや、私達が口答えしたりし

た時、お母さん、急にフツと黙ることあるでしょう？　そういう時がそんなの？

晴子

ええ。口をふさいで、（喉元を手で示し）此処まで出かかった言葉を抑え込んでるのね、きつと。

芙美子

そのやり方、どうやって手に入れたの？

晴子

あなた達と、あなた達のお父さんのおかげよ。

芙美子

え？

晴子

チヤホヤされて我が儘に育って、女学校出て、すぐにお父さんと結婚したでしょ。本当に未だ子供のままだったのね。それが次々、女の子が四人も生まれて、とにかく手がかかって仕方なかったの。しょっちゅう苛々して、すぐかツとして、酷かったわ。お父さん、何も言わないで、ずっと我慢してたのね。或る時「自分の心の中の敵」の話をしてくれたの。

芙美子

自分の心の中の敵？

晴子

ええ。それからお父さん、ずっと、私が自分の心の中の敵に負けないように励ましたり慰めたりしてくれたのよ。

芙美子

大変だった？

晴子

ええ、最初はね。でも、だんだん家の中が穏やかになって、あなた達が楽しそうにしてるでしょ。それが嬉しくて。自分の為だけだったら途中で挫けてたわ。お父さんと、あなた達がいたから続けられたのよ。

芙美子

———とても、自信ないな・・・

晴子

私も最初はそう思ったわ。でも諦めないことが肝心なのよ。

芙美子

(コクンとうなずき) うん。心の中の敵か・・・先ずは、敵を徹底分析してみる。お母さん、有難う。

晴子

(芙美子の手に自分の手を重ね) 大丈夫よ、あなたなら出来るわ。(手を離し) さ、お風呂入って、もう寝なさい。よく温まってね。

芙美子

はい。

芙美子、去る。

晴子も去る。

明かり変化し、翌朝となる。晴天のイメージ。
真理子、現れ、外を眺め、伸びをする。

真理子

いい天気！ 昨日の雪が嘘みたいだわ。

球子、現れる。

真理子

あら、球ちゃん。もう、すっかり良いみたいね。

球子

うん。

真理子

綺麗ね。昨日の雪がキラキラ光りながら溶けてるわ。

球子
（一緒に外を眺め）ほんとだ。

日向子、コーヒーのお盆を持って現れる。

真理子
あら、コーヒーの香り。

日向子
ええ。安子伯母さんにお土産でいただいたコーヒー、ネルで濾してみたの。
昨夜、遅かったし、スツキリするかと思って。球子はホット・ミルクね。

球子
えーえ、私もコーヒーがいいな。

日向子
だめよ。

球子
子供じゃないわよ、もう。

日向子
昨日、熱出した人が何言ってるの。刺激物はよした方がいいのよ。

真理子
（飲んで）苦いけど美味しいわ。ふーむ、たまらない刺激！

芙美子、現れる。

芙美子　どうしたの？　コーヒーの匂いがする。

日向子　（カップを渡し）はい、どうぞ。安子伯母さんにいただいたコーヒー。

芙美子　（受け取り）サンキュー。

　　コーヒーを飲む芙美子。
　　皆、無言で飲む。沈黙。

芙美子　球子！

球子　えっ？

芙美子　本、有難う。

　　パッと笑顔になる球子。ホッとする真理子と日向子。

芙美子
それから、貯金箱、新しいの買ってあげるわ。

球子
ホント?! 私ね、この間、真理子姉さんのデパートでチューリップの貯金箱見かけたの。あれがいい。

芙美子
調子に乗るんじゃないの。ばーか。

芙美子、自分の肩を、球子の肩にぶつける。

芙美子
あんたには豚がお似合いなの。

球子
ヒッドーイ!

球子、肩に肩でぶつかり返す。

芙美子
猫ならいいわよ、買ってあげる。タマ、タマ!

タマと言いながら、肩をぶつける。

球子

ニヤオ、ニヤオ

ニヤオと言いながら、球子も肩を打ち返す。じゃれ合う二人。
晴子も現れ、真理子、日向子と一緒に二人を見ている。

森貞夫、現れる。

貞夫

ごめん下さい。

晴子

はい。

出迎える晴子。

晴子

(驚いて) 森さん？

貞夫

はい、森貞夫です。ご無沙汰しておりました。

晴子

まあ！ 本当にお久しぶりね。

真理子、芙美子、日向子、球子、集まって来る。
貞夫、真理子と芙美子に向い

貞夫 先日は日比谷公会堂まで有難うございました。

真理子 いいえ、こちらこそ。

芙美子 楽しかったわ。素敵な音楽会だった。

晴子 ここじゃ何ですから、どうぞ、お上がりになって。

貞夫 はい。

貞夫、躊躇っている。

晴子 さ、どうぞ。

芙美子 上がってよ、貞夫さん。

貞夫
（意を決したように）失礼します。

貞夫、入り、日向子はコーヒーを下げて去る。

晴子、真理子、芙美子、貞夫は一緒に座り、球子は離れて一隅に落ち着く。

貞夫
すみません、突然お邪魔して。今日は真理ちゃ、いえ、真理子さん、遅番だから、まだお宅にいらっしやると思ってた来てしまいました。

晴子
今日が遅番で、よくご存じでしたのね。

真理子
こないだの音楽会で楽屋に伺った時、お話ししたから・・・

晴子
そう。（フツと黙る）

日向子、現れ、貞夫の前にお茶を置く。

貞夫
日向子ちゃんですよね？

日向子

ええ。

貞夫

大人になったなあ。

日向子

だって貞夫さんが、道彦さん教えてらした頃、私、小学校卒業して女学校に入学したあたりでしたもの。(お茶をすすめて) どうぞ。

貞夫

有難う。

芙美子

でも、どうしたの？ 急でびっくりしたわ。

貞夫

聴きに來てほしいんです、明日。最後の演奏になるかもしれないから……

芙美子

え？ どういうこと？

貞夫

店を閉めることになったそうです。

芙美子

あのダンスホール！？

芙美子、自分が思わず口にした言葉で、ハッと晴子を見る。

貞夫

(晴子に) 確かに、あまり健全な場所ではありませんが、責任をもってお
護りします。

晴子

道彦さんは? このことご存じなの?

貞夫

いえ、まだ。今朝、バンド仲間から連絡が来て、そのまま、こちらへ来て
しました。

芙美子

そうよ、道彦さん誘うわ。道彦さんが一緒ならいいでしょう? お母さん。

晴子

あんまり急で、ご都合つくかしら・・・

芙美子

つけてもらうわ。最後なのよ。

安子、現れる。

安子

御免なさいよ。

日向子

安子伯母さんだわ！

晴子、貞夫に小さく会釈し、出迎えに席を立つ。

日向子はお茶の支度に行く。

晴子

姉さん、いらっしやい。さ、どうぞ。

安子

お客さんかい？

晴子

ええ。以前、久我さんのところにいらした森さんですわ。

安子

ああ、道彦ちゃんの勉強見てた学生だね。今は、親の反対押し切って楽団でラッパ吹いてるんだって？ 困ったもんだ。

安子の言葉が聞こえ、気まずい貞夫と娘達。

安子、ズカズカと入ってくる。貞夫、安子に会釈。

安子、座る。

安子

真理子、心は決まったかい？ 一週間には未だ間があるけど、見合いの答えは少しでも早い方がいいからね。

見合いという言葉に敏感に感応する貞夫と真理子。

安子

ええ、真理子、聞いてるかい？

真理子

(貞夫を気にしながら) ええ・・・

安子

あの相手なら、一生困ることはないからね、保証するよ。だから早いところ決めないと。

日向子、紅茶のお盆を手に現れ、カップを置く。

日向子

どうぞ。

安子

ああ、いい香りだ。有難う。

貞夫、立ち上がる。

貞夫 あの、突然お邪魔して申し訳なかつたです。

芙美子 え、帰るの？

貞夫 はい。失礼します。

晴子 何のお構いも致しませんで・・・

貞夫 いえ。

貞夫、出てゆく。追って真理子も見送りに出る。

真理子 行きます。必ず行きますから。

真理子に笑顔を向ける貞夫、一礼し去る。

安子 晴子さん

晴子
はい。

安子
サンフランシスコの事でね、準備を始めなきゃならなくて、旅券を取るのに戸籍謄本が必要なんだよ。球子の謄本、取ってきてもらえるかい？

驚く晴子、芙美子、真理子、日向子、球子。
青ざめてゆく芙美子。四人、いたたまれない気持ち。

晴子
え？ 球子の戸籍謄本ですか？ 芙美子のじゃなくて。

安子
ああ、球子のだよ。来年の三月には卒業だから四月からは暇になるだろう？

晴子
てつきり・・・芙美子がお供させていただくものとはかり思っていました。

安子
芙美子に頼みたいだなんて一度も口にしてないよ。芙美子には手伝いに横浜へ通ってもらってるからね、まあ、そう思い込むのも無理はないか。でもね、こういうのは若いうちが一番なんだよ。行儀や、人様との付き合い方や、みっちり仕込むのに良い機会だからね。球子！

球子
はいっ！（ビクンと直立不動）

安子
卒業した先の事は何か考えてるのかい？

球子
あの、タイピストの学校に・・・行きたいと思ってます・・・

安子
晴子さん、聞いてたのかい？

晴子
いえ・・・

球子
まだっ、お母さんには相談してないです。

安子
じゃ、決まり事っていう訳じゃないんだね？

晴子
ええ・・・

安子
なら良かった。タイピストの学校は次の年からおし。外国へ行くなんて
機会はそうあるもんじゃないんだからね。

球子、直立不動のまま、うつ向いている。

安子
いいね、球子。

球子
(消え入りそうな声で)・・・はい。

安子
晴子さん

晴子
はい。

安子
膳本、急いでおくれね。役所事だから時間がかかるに決まってるんだ。本当にのんびりしてるからね、あの連中は。まだるっこいったらありゃしない。頼みましたよ。

晴子
はい。

安子、紅茶を飲み干す。

安子 日向子、お前の紅茶は美味しいね。ごちそうさん。

日向子 いえ・・・

安子、立ち上がる。

晴子 お帰りですか？

安子 これから商工省の貿易局に行かなきゃならないんでね。真理子、叶うならお前の花嫁姿を見届けてから出発したいんだよ。年が明けて結納、三月の大安に式と披露宴。この日程で進めたいんだけど、どうだい？

真理子 私・・・そんな・・・

安子 じれったいねえ、まったく。下手な考え休むに似たりつてね。時には、思いつきりが大切なんだ。飛び込みまえば、後は何とかなるもんなんだよ。

芙美子 おばさん、それ、あんまり無責任じゃないですか。何とかなるなんて、そんないい加減な気持ちで結婚に踏み込めるはずないじゃないですか。

晴子

芙美子！

芙美子

お母さん、ごめんなさい。私、自分の敵に負けてる。でも駄目・・・おばさん！ それに真理子姉さんは、おばさんの為に結婚する訳じゃないでしょう？ 真理子姉さんは真理子姉さんの為に結婚すべきなんです。一生に一度って思う相手と、一番いいと思う時に。じゃないと自分の人生に納得できないじゃないですか。納得できなきゃ責任も取れません。だから、もう強要はやめて下さい。これ以上、真理子姉さんを苦しめないで！

安子

芙美子！ お前、自分が今、何を言ってるのか分かってるのかい？

晴子

すみません、姉さん。申し訳ありません。

安子

私はね、お前達を自分の子供だと思ってるんだよ。だから弟が亡くなる前に誓ったんだ。心配するな、後は引き受けるって。恩を売ろうだなんて、そんなことは、これっぽっちも思っちゃいけないよ。おまえ達が幸福でいることだけが望みなんだ。それを強要って言われたんじゃ、どうしようもないじゃないか。

晴子 芙美子、お詫びしなさい。芙美子！

芙美子 嫌よ。本当のことだもの。

晴子 すみません。姉さん。申し訳ありません。

安子 晴子さん、どんなに嫌われようと煙たがられようと、これまで通りちゃんと援助は続けるからね、心配はいらないよ。

晴子 姉さん……

安子 だけど、まあ、飼い犬に手を噛まれるとは、このことだ。邪魔したね。

晴子 申し訳ありません。

安子、去る。晴子、お辞儀をしまま頭を上げずにいる。

日向子、晴子の肩に触れ上体を起こさせる。

日向子 お母さん、もう、おばさん行ってしまったわ。

真理子 ごめんなさい。私の所為で……

晴子、真理子の肩に「気にするな」と触れる。

球子 私……サンフランシスコ、行かない。

芙美子 だめよ、行かなきゃ。私ことは気にしないで。伯母さんと三月も一緒にいたら、きつと毎日言い合いね。天敵なんだわ。球子、こんなこと滅多にないんだから、行きなさい。

球子 でも……

芙美子 船には乗らなきゃダメよ。あんたにしか出来ない仕事があるんだから。

球子 何？

芙美子 ネズミ退治。昔から言うでしょう、船には猫を乗せて行くって。ちゃんと

お勤め果たしなさいよ、タマ。

球子

猫じゃないもん。

芙美子、球子の頭をグシャグシャッと撫でて

芙美子

ちよつと散歩してくる。

芙美子、去る。

真理子

お母さん、私……

晴子

真理子、一番大切なのは自分の気持ちよ。後悔するようなことは、絶対に
してもらいたくないの。

真理子

お母さん……

晴子

早く出掛けなさい。デパート、遅刻するわよ。

晴子、去る。

真理子

球ちゃん、芙美子と仲直り、嬉しいわ。

球子

うん。

真理子、去る。

日向子

ネズミ退治は大事な仕事よ。

日向子、去る。

球子

本当に、とんでもない午前中でした。貞夫さんの事は、あんまり覚えてないんです。真理子姉さんと芙美子姉さんが、時々、宿題を見てもらったのは道彦さんのお宅だったし、貞夫さん、家には姉さん達を送りついでに、数回寄っただけだったんです。突然の登場でほんとに驚きました。でも、もっと驚いたのがサンフランシスコです。天と地がひっくり返ったような気分です。芙美子姉さんが気の毒過ぎて・・・嬉しいけど嬉しくない。行きたいけど、行きたくない。何とも矛盾に満ちた、形状しがたい気持ち

です。

球子、嘆息し、去って行く。

明かり変化し、神社の一隅のイメージのエリアとなる。

球子、現れる。ガツカリと気落ちしている。

道彦、現れる。

道彦 やっぱり此処だ。

芙美子 ああ、御曹司。

道彦 今、お宅に行ったんだ。そしたら散歩に行ったって。

芙美子 こんな処しかないのよ、一人になれる場所は。

道彦 聞いたよ、おばさんから。球ちゃんが行くことになったって。

芙美子 なったんじゃないわ。最初から決まっていたのよ。私が勝手に早とちりして

舞い上がったただけ。まるでピエロだわ。

道彦

小津のおばさんも、罪作りな事するよな。

芙美子

だから、私の思い込みだったって言ってるじゃないの。悪いのは私よ。浅はかで、考え無しで、お調子者で、大馬鹿者！私なんて何の価値もないんだわ。それなのに、いっぱしの生意気言って、酷い言葉で傷付けて、救いようがないのよ！

自己嫌悪で頭を抱え込む芙美子。

道彦

ねえ、一緒に行こうよ、サンフランシスコ。

芙美子

あなた、バカじゃないの？ 私は行けないって聞いたんでしょ。行くのは球子よ。

道彦

だから一緒にさ、夫婦になって船に乗ろうよ。

芙美子

何、言ってるの！？

道彦 結婚してくれないか、僕と。

芙美子

え？

道彦

初めて会った時から好きだったんだ。君と一緒にいると人生が何倍も楽しくなる。同じものが好きで、同じものに笑って、同じものに腹を立てて、こんなに気の合う人は、芙美ちゃんしかいないんだ。これからも、ずっと一緒にいてほしい。芙美ちゃんと人生を歩きたい。僕の奥さんになってほしいんだ。

芙美子

—— 無理よ。

道彦

どうして？

芙美子

私達、似すぎてるから。

道彦

え？

芙美子

似すぎるくらい似てるから。友達としてなら最高のよ。でも、夫婦なら反発し合うに決まってるわ。磁石のプラスとプラスなんですよ。絶対にくっつかないじゃない？ くつつく筈なのよ。くつつかなかつたら別れしかないもの。あなたは、私にとって大事な人なの。大切な・・・同志なの。だから別れるようなことになりたくないの。

道彦

別れないために結婚はしないって——何だよ、それ。理屈になってるようで、とてもなつてるとは思えない。狐につままれてるみたいだ。でも、一つだけハッキリしたよ。芙美ちゃんは、僕を愛してはいない。

芙美子

ごめんなさい。でも、夫としては、なの。同志としては心から愛しているわ。

道彦

いったい何の同志さ。僕たち、主義も主張も持ってないし、何の組織活動もしていない。怠け者同士ってところかな？

芙美子

心の自由を愛するもの同志だわ。

道彦

(嘆息し) 芙美ちゃんには敵わないや。

小間

道彦　ダンスホール、明日一緒に行くよ。

芙美子　ほんと？　有難う。恩に着るわ。日向子から聞いたの？　球子から？

道彦　いや、貞夫さんから。芙美ちゃん家に行った後、家に来たんだ。バンドの中に地下組織に関わってるヤツがいて、あのダンスホールも一役買ってるんだそうだ。ずいぶん念入りに嗅ぎ回ったらしいけど証拠が拳がらなくてね。業を煮やした当局から、とうとう封鎖の命令が下ったって次第さ。このこと、おばさんには内緒だよ。そんな危険な所へは出してくれなくなるから。

芙美子　本当に危なくない？

道彦　僕というナイトを見くびらなくてくれ給え。何があっても君達を護り通すよ。でも、明日は大丈夫だ。確かな情報筋から聞いたから心配ない。

芙美子 何だか、世の中が嫌な方へ向かってるみたい。

道彦 同感だ。

芙美子 ああ、寒い。冷えちゃった。戻るわ。寄る？

道彦 いや、さっき寄ってきたから。帰るよ。

芙美子 そう。

道彦 途中まで送るよ。

芙美子 有難う。

二人、去る。

明かり変化し、夜となる。

晴子がいる。繕い物をしている。

芙美子、現れる。

芙美子 お母さん、ちょっといい？

晴子 いいわよ。

芙美子 皆は？

晴子 球子はお風呂。日向子は台所よ。真理子はじきに戻るでしょ。

芙美子 うん。

芙美子、座る。

芙美子 お母さん、今日は本当にごめんなさい。謝ります。

晴子、嘆息し、繕いの手元を小さく片付け、座り直す。

芙美子 私、自分の心の中の敵に、完膚なきまでに打ち負かされました。

晴子
そうね。

芙美子
一生懸命に安子伯母さんに頭下げてるお母さん見て、申し訳なくて。

本当にごめんなさい。

晴子
済んだことは仕方ないわ。それよりも諦めないでね。

芙美子
はい。それで、頭を冷やしたくて神社に行ってたの。そしたら道彦さんが

来て……

晴子
あなたが出掛けて、すぐにいらしたのよ。お父様が向こうから送って下さったサンフランシスコの地図と案内書を持ってきてくださったの。あなたに見せたくて。

ちよつと屈折した隙を見せてしまう芙美子。

晴子
気を悪くしたら、ごめんなさいね。黙ったかとも思ったんだけど、でも本当のことだから。

芙美子　　いいのよ、お母さん。気にしないで。もう大丈夫だから。

晴子　　（うなづく）

芙美子　　それでね、道彦さんに一緒に行かないかって誘われたの。

晴子　　（驚いて芙美子を見る）

芙美子　　誰でも自由に外国へ行けるわけじゃないでしょう？　政府か学問か貿易の関係がないと渡航の許可がおりないじゃない？　道彦さんは貿易関係の許可があるから、奥さんなら同行が認められるって考えたんだと思う。それで結婚して一緒に行こうって。

晴子、衝撃を受けている。

芙美子　　私、お断りしたの。

晴子　　そう。．．．お断りしたのは賢明な選択だったと思いますよ。あなたと道彦さんは似すぎてるから。

日向子、現れる。が、道彦という言葉と二人の様子に、中へは入らず立ち聞きの形になってしまう。

芙美子　　そうなの！　やっぱり、お母さんもそう思うでしょ？

晴子　　ええ。

球子、現れる。が、立ち聞きスタイルの日向子の姿が目に残り、立ち止まる。そして同じ立ち聞きスタイルとなる。

芙美子　　それでね、私、名古屋に行きたいの。

晴子　　え？

思わず顔を見合わせる日向子と球子。

芙美子　　しばらく名古屋に行きたいんです。女学校時代の友達が、名古屋の事務所に居て、人が足りなくて困ってるって連絡してきたの。

晴子

何の事務所？

この時、真理子、帰って来る。

真理子

た・・・

日向子と球子、唇に指を立てて真理子に合図する。

真理子、球子に引きずり込まれ、二人に重なり盗み聞きスタイルに同化する。

芙美子

基盤になつてるのは平塚らいてうや市川房江さん達が設立した「新婦人協会」。そこから派生して母子保護や生活防衛を応援するために活動する団体の事務所なの。協会の大きな目的は女性の参政権を得ることなんです。でも、それは時間がかかることだから、まずは目の前の困りごとから改善していこうって頑張ってるの。

晴子

どうして名古屋なの？ 東京じゃダメなの？

芙美子

協会の本拠地は東京なんだけれど、人が足りなくて困ってるのは名古屋なのよ。住むところも有るの。アパートを借りて、そこを寮にしてるんですって。それに、安子伯母さんの処へは、もう行けないもの。思い切った新しい、意味のあることに挑戦したいんです。

晴子

でもね、芙美子、名古屋は遠いわ。別の理由があるんじゃない？

芙美子

東京から——離れたいのよ。安子伯母さんには、もう顔向けられないし、道彦さんのことも・・・私がこの家に居たら、道彦さん、来にくいでしょう？ 顔に出すような人じゃないから結婚断ったことなんか忘れたフリして、いつも通りに尋ねて来ると思うけど、回数はずんと減ると思うの。三月から一年も居なくなんですもの、出発までは今まで通り、毎日来てもらいたいの。日向子に淋しい思いをさせたくないのよ。日向子、道彦さんの事が好きなんだから。私が居なければ、何もかも今まで通りに過ごせるわ。だから、東京を離れたいの。

日向子、思わず飛び出してゆく。

日向子

芙美子姉さん、それ、違うわ！

晴子

日向子！（二人の姿も見止め）何なの、真理子も球子も、黙ってそんな所で立ち聞きなんて、恥を知りなさい。

日向子

ごめんなさい。お母さん。でも違うの。私の事なら違うの。だから芙美子姉さん、行かないで。

芙美子

日向ちゃん・・・

日向子

道彦さんが来ると楽しいし、賑やかになるし、心が弾むわ。でも好きとか結婚したいとか、そんなんじゃないの。私、自分が何をしたいのか見つけられないまま女学校卒業しちゃったでしょ、だからってお見合いや結婚する覚悟もないし、どうしていいか分からないの。だから姉さんたちが眩しかったの。道彦さんと冗談言ったり、からかい合ったりしてる芙美子姉さんが羨ましかったの。私もやってみたかった。だからきつと意識し過ぎて変な様子になってたんだわ。それだけなの。好きとか嫌いとか、そういうのじゃないの。だから芙美子姉さん、行かないで！ そんなの嫌よ。お母さんが居て、真理子姉さんが居て、芙美子姉さんが居て、球ちゃんが居て、一緒にご飯食べて、笑い合って、時々ケンカして、どんなに煩くって

大変でも、ずっと一緒に居たいのよ。だって家族なんだから、そんな・・・消えるみたいに居なくなったりしないで。

芙美子
日向ちゃん・・・

真理子
芙美子、あなたが居なくなったら静かになり過ぎて、家の中、灯りが消えたみたいになっちゃうわ。

球子
ずっと居てくれるなら、私、タマって呼ばれても文句言わない。

芙美子
ジョージ・エリオットが言ってるわ。空の星になれないなら、せめて家庭の灯りになりなさいって。私なんかでも家の灯りになれるかしら。

晴子
じゅうぶん、なってますよ。

芙美子
時々、停電するのには？

真理子
大丈夫よ。私だって輝く星にはなれないもの。その時は選手交代で灯りになるから。

球子　　私も。灯りになる。

芙美子　ええっ！　球子の球は球切れおこして使えないんじゃない？

球子　　ひどい！　芙美子姉さんの意地悪！

日向子　球ちゃん、大丈夫、一緒に光りましょう。球切れしたら、すぐに取り替えてあげるから。それで夕方になったら灯りをつけて、皆の帰りを迎えますよう。

真理子、そっと小さな声で「私の青空」を歌いだす。

球子、日向子、芙美子も加わり、四姉妹で歌う。

にこやかに、優しく、歌、終わる。

晴子　　この際だから、私もね、今まで黙ってたけど、本当のこと言うわ。

一同、緊張して晴子に集中する。

晴子
球子

球子
はいっ！

晴子
あなたに、ボールの球子って名前つけたの、私なの。

一同、えッと拍子抜けする。

晴子
女の子が生まれて、お父さん、あんまりがっかりした顔するから腹が立ったのよ。それで、私が球子っていう名前にしたの。ごめんなさい。悪かったわ。

球子
お母さん……

晴子
だからね、お父さんのことは恨まないでね。

球子
はい！

皆、堪えていた笑いが弾けてしまう。

笑いながら、夫々に去って行く。

一人残る、球子。

球子

翌日の夜、真理子姉さんと芙美子姉さん、付き添い役の道彦さんの三人は、あのダンスホールへ出掛けて行きました。でも、すぐに帰って来たんです。行ったら、閉まってたんだそうです。ドアのガラスのところから中を覗いてみると、誰も居なくてガランとしてて、椅子やテーブルが倒されて散らばっていたそうです。割れた窓から北風が吹き込んで、カーテンが揺れてたって芙美子姉さんが言っていました。道彦さんも一緒に戻って来て、皆で一緒に日向子姉さんの淹れてくれた紅茶を飲みました。いつもと変わらない道彦さんのままで、少しホッとしました。

今日は、安子伯母さんが、真理子姉さんに宣言をした、あの一週間目の日です。もう夕方になるのに安子伯母さんは姿を見せません。真理子姉さんは、あのダンスホールの日から、あんまり眠ってないようです。芙美子姉さんは、前よりもっと強くなったみたいです。日向子姉さんは少し明るくなったような気がします。お母さんはいつも通り優しく、美味しいご飯を作ってくれます。

明かり変化し、夕方過ぎのイメージとなる。
晴子、現れる。

晴子
球子、球ちゃん！

球子
はい。

晴子
あなた達の部屋の方、雨戸閉めてきてちょうだい。雪になりそうなの。

球子
はい。

球子、去る。

日向子、小皿を水平に持って現れる。

日向子
お母さん、お味見お願い。

晴子、小皿を口に付け、味見をする。

晴子

うん、いいわ。日向子、腕上げたじゃないの。

日向子、ニコツと笑い、小皿を受け取る。

芙美子、現れる。

芙美子

ああ、寒い。お風呂、焚きつけて来たわ。真理子姉さんは？

日向子

台所。さっきからずっと大根、千六本に刻んでるわ。一本、まるごと刻むつもりよ。あんなに沢山どうしよう。

晴子

何か手仕事してないと落ち着かないのよ。ついでに人参も千切りにしてもらって、紅白なますにしましょう。

日向子

凄い量のなますになりそう！ 食べ終わるのに一週間はかかるわ。

日向子、台所へ去る。

芙美子

来ないわね、安子伯母さん。

晴子 年の瀬も押し迫ってお忙しいのよ。あちこち廻ってらっしゃるんじゃない？

芙美子 あんな悪態吐いちゃったからな・・・横浜の手伝いもサボってるし・・・

晴子 大丈夫よ。あっけらかんとして、いつも通りにいらっしやるわ。安子伯母さんは、そういう人だから。サツパリしてるのよ。あなたに似てるわ。

芙美子 ええ！ ヤダ！ 血を呪うわ。

安子 この時、安子、現れる。
邪魔するよ。

晴子と芙美子、アツと顔を見合わせる。

晴子 はーい。

晴子、玄関へ飛んでゆく。

晴子　まあ、姉さん、お待ちしてたんですよ。

安子　降ってきたよ。これは積もるだろうね。

晴子　さ、どうぞ、どうぞ。

安子、中へ入る。

芙美子　いらっしやいませ。

安子　芙美子、お前に清書を頼みたい手紙と書類が溜まってるんだよ。年が明けたら、もう一日増やして週に三日、来ておくれ。いいね。

芙美子　はい。

安子、座る。日向子が紅茶をもって現れる。

日向子　こんばんわ。どうぞ。

安子
こんな冷える日は熱いお茶が何よりだ。有難うよ。

安子、紅茶に口を付ける。球子、現れる。
真理子も現れるが、中へ入らず入口に立つ。

球子
いらっしやい。

安子
球子、ちゃんと勉強してるだろうね？ 三月には何が何でも卒業しておくれよ。じゃないと準備がまるまる無駄になっちまうんだからね。

球子
はい。

安子
真理子は？

真理子
はい。

真理子、安子の前へ歩み出る。

安子
一週間だ。答えを聞かせてもらおうよ。

真理子

はい。

この時、森貞夫が現れる。
手にはクラリネットのケースを持っている。

貞夫

ごめん下さい。

晴子

はい

晴子、玄関へゆく。

晴子

まあ、森さん

芙美子、日向子、球子。玄関へ行く。

貞夫

夜分にすみません。入隊が決まりましたので、挨拶に伺いました。

真理子、スツと立ち玄関へ行く。

晴子
いつ決まりましたの。

貞夫
一昨日、召集令状が届きました。

安子も玄関へ行く。

安子
ご苦労様です。

貞夫
いえ。(真理子を見つめ) 守るべき人の為に、努めて参ります。

晴子
どうぞ、お上がりになって。

貞夫
いえ、ここで。有難うございます。

安子
日向子、お酒。持っておいで。

日向子、台所へ去る。

晴子
ご出発はいつ？

貞夫
五日後です。明日、福島の実家に戻り、そこから入隊します。

芙美子
ダンスホール、閉まってきました。

貞夫
（真理子を見つめ）いらしてくださいましたね。

真理子
（うなづく）

貞夫
連絡出来ずに、失礼しました。お宅へ伺った夜に、ダメになったんです。

真理子
御無事でよかったですわ。

日向子、日本酒の入った茶碗を持って現れる。

安子
晴子さん

晴子、日向子からお盆を受け取り、貞夫に差し出す。

晴子
どうぞ。空けて下さい。

貞夫
有難うございます。頂戴します。

貞夫、一息でお酒をあおる。

貞夫
御馳走様でした。

貞夫、茶わんを戻すと、クラリネットのケースを持つ。

貞夫
真理子さん

真理子
はい

貞夫
(クラリネットのケースを捧げ) あなたに受け取っていただきたいんです。

真理子
え？

貞夫

バンド仲間とダンスホールの一件で、だいぶ当局から目を付けられているんです。ですからたぶん、送られるのは最前線です。もう、これを手にすることもないと思います。ご迷惑は承知です。邪魔でしたら処分してください。ただ、あなたに受け取って欲しいんです。

真理子、受け取る。

貞夫

有難うございます。(真理子を見つめ) もう、思い残すことはありません。(皆に視線を向け) 有難うございました。行って参ります。

貞夫、一礼し、背を向け去って行く。

晴子

真理子、行きなさい。

真理子

え？

晴子

追いかけてなさい。まだ間に合うわ。

安子

晴子さん！

晴子

心を残した後悔は、後の人生を台無しにするわ。

真理子、球子の胸にクラリネットのケースを預け、出て行くとする。

安子

真理子！ お待ち！

安子、真理子の腕を掴む。止まる真理子。
と、日向子、飛び出し、安子の手を真理子の腕から引き剥がす。そして安子を押さえる。

日向子

真理子姉さん、行って。お母さんのことは心配しないで。私、ずっと側に居るから。行って。

芙美子、素早く自分の着ていたカーディガンをサッと脱ぎ、真理子の肩に掛ける。

芙美子

急いで！

真理子、コクンとうなずき、飛び出して去る。
我に返った日向子、気まずく安子から離れる。

安子

晴子さん！

晴子

はい。

安子

いったい、どういう育て方をしたんだい？
（嘆息し）世も末だよ、まったく。

日向子

熱い紅茶淹れなおします。

安子

ああ、もういいよ。草臥れた。帰るよ。答えを貰いに来たのに、答ごと逃げて行っちゃったからね。もう、用は無い。じゃ。

安子、去って行く。見送った四人、しばし無言となる。
間。

やがて、晴子、一つ息をついて動き出す。

晴子

さあ、取り敢えず、お夕飯にしましょう。球子、重いでしょう。置いてきなさい。

球子

はい。

球子、去る。

芙美子

嗚呼、気が付いたらお腹ペコペコ。死にそうだわ。

日向子

とにかく、なますを作っちゃわなきゃ。

晴子、芙美子、日向子、台所へ去る。

明かり変化し、オーバーを着て大判スカーフを被った大人の球子が現れる。

球子

十七歳の球子は、翌年の春、サンフランシスコへ旅立ちました。そして（自分を示して）現在に至る、です。あの年に始まった日中戦争は加速を増し

て、四年後の十二月にはアメリカに宣戦布告、第二次世界大戦に突入していききました。この辺りも東京大空襲の時に爆撃を受けて、私達が暮らしていた家も、全部、燃えてしまいました。でも、あの頃の事は、記憶の中に何もかも鮮明に残っているんです。真理子姉さんは貞夫さんと結婚しました。貞夫さん、中国の前線から帰還したんです。本当に奇跡です。戦後はバンドマンの仕事に戻りました。芙美子姉さんは、安子伯母さんの家で暮らしています。安子伯母さんと芙美子姉さん、喧嘩ばかりしているけど本当は気が合うんだと思います。母も一緒です。日向子姉さんは、あの後、看護婦さんになって、従軍看護婦として大活躍してました。でも、残念なことに、従軍先で砲弾を受けて亡くなってしまいました。そして私は、驚かないでくださいね、道彦さんと一緒にになりました。サンフランシスコですっかり意気投合してしまっただけです。つくづく縁は不思議だと思います。この辺りの事を、また、いつかお話しさせていただいたら嬉しいです。本当に平凡な、何処にでもいる家族です。でも何だかんだと色々ありました。東京の空の下、沢山の家族が暮らしています。その家族の分だけ、何だかんだがあるんだと思います。たとえ一人で暮らしていたとしても、この世に生を受けた以上、必ず家族は居ますもの。すべての家族に幸あれと祈らずにはいられません。

